

作品梗概集

- * 梗概は、執筆者の意図を尊重して、執筆者別に掲載した。
- * 一人の執筆者の梗概が複数ある場合は、初演の年代順に従った。
- * 初演年代は原則としてダイエルコウフ＝オルスポエルとランカスターに拠った。

Maximian : *Thomas Corneille*

テキスト	<i>Oeuvres</i> , Genève, 1758, Slatkine Reprints, 1970
ジャンル	五幕韻文悲劇
初演年	1662年2月(ロレの手紙による)
初演劇団	オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版年	1662年 Courbé, Paris.
出典	Caussin, Cour Sainte, II-31-47. (1637)

ランカスターは恋愛関係の造形にあたって、兄のピエール作、『ポリュクト』に影響を受けた部分があるとする。作者はオルレアン公フィリップへの手紙を作品冒頭に掲げ、マクシミアン(マクシミアヌス)とディオクレシャン(ディオクレティアヌス)の比較を行い、過ぎた野心は不幸のもとであり、王弟殿下の寛容と感情を統御する美德は全欧称賛の的であると述べる。また、この作品は反面教師として役に立つはずだ、と心からの忠誠を捧げている。場所はマルセイユ、ローマ軍がガリアを平定した頃。

[第1幕]

元皇帝のマクシミアン(Maximian)はローマ皇帝で娘婿、コンスタンタン(Constantin)の絶大な勢力に脅威を感じる。この凱旋を口実に、セヴェール(Sévere)に副帝の地位を与え、力の均衡を図ろうと考える。コンスタンタンの妹、コンスタンス(Constance)をセヴェールと結婚させ、地位、身分共に同等にするのだ。かねてよりコンスタンスと相思相愛だが、身分違いのリシーヌ(Licine)は絶望する。コンスタンタンの皇后で娘のフォースト(Fauste)に対して、マクシミアンはセヴェールとコンスタンスの結婚話を進めるよう依頼する。フォーストは政略結婚のために諦めたかつての恋人、セヴェールの変わらぬ愛を知る。

[第2幕]

コンスタンタンは最初からセヴェールに副帝の地位を与えるつもりでいる。セヴェールがフォーストを未だに愛していることはわかっていた。結婚させ、副帝に任じて、遠隔地を治めさせれば、フォーストから引き離すことができる。兄は、生まれに相応しい結婚こそが幸福なのだと妹の説得

に努める。抗弁する妹に、コンスタンタンはリシーヌに固執すれば彼の身が危ういと脅迫する。一方のセヴェールはコンスタンスとの結婚がフォーストのためになるなら考えてみると譲歩する。

[第3幕]

フォーストとセヴェールは互いの愛を確認し、セヴェールは皇帝の命が狙われている、と告げる。フォーストは夫と父の対立、セヴェールへの御しがたい愛に苦しむ。コンスタンタンはマクシミアンに対し、暗殺未遂について説明するが、実の首謀者はマクシミアンだ。マクシミアンの側近、マルシアン (Martian) はリシーヌが首謀者だと嘘をつく。リシーヌは反論できず、逮捕される。父の嘘と夫の偽りの恭順に居たたまれなくなったフォーストは初めて父に抗い、夫の後を追って退出する。

[第4幕]

コンスタンスは陰謀の黒幕は他にいと疑い、セヴェールに公正な調査をしてもらえるよう、マクシミアンに頼む。もはや隷従の身には我慢がならず、マクシミアンは皇帝暗殺を誓う。フォーストにリシーヌの再審を求められて、嫉妬に狂ったコンスタンタンは、マクシミアン、フォースト、セヴェールが共犯だと言う。マクシミアンは錯乱したふりをする。セヴェールがフォーストを庇うので、皇帝の激怒は募り、セヴェールの恋こそが諸悪の根源だ、と決めつける。マクシミアンは、セヴェールの命が惜しければ、自分の言うことを聞け、と娘を脅迫する。

[第5幕]

リシーヌとセヴェールを要求する民衆の声に応じて、コンスタンスは独断で牢獄を開く。コンスタンタンはフォーストにまで疑いをかけたことを反省する。嫉妬のために盲目になっていたのだ。コンスタンタンはマクシミアンを断罪することに決める。マクシミアンは、フォーストも共犯なのだとして保身を図る。刺客に襲われ、瀕死のセヴェールが運び込まれ、マクシミアンの陰謀を告発する。コンスタンタンに向かって、「生きて、統治して、愛してください」と願う。フォーストは父を許してくれるよう頼むが、マクシミアンはこれ以上生き恥をさらすのは御免、とばかりに自刃する。コンスタンタンはリシーヌを許し、セヴェールの代わりに妹と結婚することを認める。

(浅谷真弓)

Antiochus : *Thomas Corneille*

テキスト	<i>Oeuvres</i> , Genève, Slatkine Reprints, (1758・1763), 1970.
ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演年	1666年1月9日、クレキ侯爵邸、オテル・ド・ブルゴーニュ座員 1666年5月25日、オテル・ド・ブルゴーニュ座
初演劇団	オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版年	1666年 Maury, Rouen. Billaine, Paris. De Luynes, Jolly, Quinet, Paris.
出典	プルタルコス、アッピアノス、ヴァレリウス・マクシムス

ランカスターはキノー、デュファイヨ、ブロスなどを参考にした、とする。作者は「読者へ」の中で、「ヴァレール・マクシムは、父が息子に与えた稀なる慈愛の例としてこの逸話を紹介し、同じくアッピアノスやプルタルコスなどが伝えている。セレウキウスが有名になる以前に行ったことで、セレウキウスとストラトニスがすでに結婚していたとすると、今日のモラルには受け入れられないので、これは変えた。また、アンティオシュが信義に厚い人物となるよう努めた。出典にある医師、エラジストの代わりにアルシノエを加えて、重要な役割を与えた」と言う。舞台はシリー（シリア）の首都

[第1幕]

アンティオシュ (Antiochus) の悩みの原因は、自分自身の感情を律することができずに、王位など継承できまい、ということだ。父である国王との結婚が間近に迫っている美しいストラトニス (Stratonice) のことが頭から離れないのだ。ストラトニスは自分の存在がアンティオシュを宮廷から遠ざける原因なのかと率直に尋ねる。王妃、義母となって、王家の権力を分け持つことが嫌なのだろう、と推測している。聞き役のフェニス (Phénice) は王子がストラトニスと対面するときの挙動が不審なのに気付いていた。ストラトニスは王子を尊敬したいと思いつつ、実際には愛していたのだと認める。フェニスは望みのない恋は忘れるように忠告する。ストラトニスは義務に従って結婚することを誓う。国王セレウキウス (Séleucus) は明日の婚礼の準備が整ったことを告げる。唯一の心配事は息子の気鬱の病だけだ。

[第2幕]

国王の姪、アルシノエ (Alcinoé) は王子の病の原因が恋であることを知っていた。しかし、その相手は自分ではなく、ストラトニスだ。アルシノエは王子に肖像画の箱を渡す。王子は病の原因を追究するストラトニスから逃れるため、アルシノエからもらった肖像の箱を見せる。ストラトニスは彼の恋の相手を了解し、箱を持ち去る。錯乱するアンティオシュには、友のティグラヌ (Tigrane) の慰めが耳に入らない。アンティオシュは諦めて、王に会う決心をする。

[第3幕]

王はストラトニスを問いただす。アンティオシュはストラトニスを庇い、十分親切な言葉をいただいた、と言う。ストラトニスは肖像画の箱を王に渡す。王が肖像画を見ようとすると、アンティオシュは「罪」を認め、自分を追放してくれるよう、願う。王は肖像画を見て、罪も罰もありはしない、と意外な答えを出す。王はティグラヌに、王子とアルシノエの結婚話を進めるように命じる。肖像画はアルシノエのものだった。アンティオシュは間違いに気づいて抵抗するが、王は息子が遠慮しているのだと思い込み、話を聞かない。ストラトニスも王子とアルシノエの結婚に賛同する。ティグラヌは、突然恋敵となったアンティオシュの言うことが信じられない。アルシノエは全体の構図を見通して、ティグラヌには安心しているように言う。

[第4幕]

ストラトニスはアルシノエとティグラヌが相思相愛なのを知っている。アルシノエとアンティオシュの結婚はありえない。アンティオシュは遂に、自分の心を占める人がストラトニスだと打ち明ける。アルシノエは業を煮やし、アンティオシュに詰め寄る。アンティオシュは事実を認め、ストラトニスの肖像画を返してほしいと頼む。アルシノエは返すと約束しつつ、作戦を練るために出ていく。

[第5幕]

アルシノエは、息子の命を救うためなら何でもするのか、尋ねる。王がもちろん何でもすると答えるのを待っていたかのように、アルシノエは王子の恋の対象がストラトニスであることを告げる。王は熟慮の末、息子にストラトニスを譲ると言う。ストラトニスはティグラヌとアルシノエの結婚を認めるよう王に進言する。王の望みは、王子が王位を継承することとストラトニス王妃になることだけだ。父は、さらに躊躇する息子を宥め、強く命じて、ストラトニスと結婚し、フェニス（フェニキア）の王となるよう迫る。アルシノエとティグラヌの結婚も再度祝福を受ける。

(浅谷真弓)

Laodice, reine de Cappadoce : Thomas Corneille

テキスト	<i>Oeuvres</i> , Slatkine Reprints, Genève, 1970 (1758/1763)
ジャンル	五幕韻文悲劇
初演年	1668年2月11日(ロビネによる)
初演劇団	オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版年	1668年、Barbin, Rouen. Quinet, Paris.
出典	ポンペイウス・トログス、ユニアヌス・ユスティヌス『地中海世界史』第37巻

『地中海世界史』によれば、紀元前100年前後、ラオディケは6人中5人の息子を殺し、自ら王位に就いた。生き残った一人は親族に守られ、成長し、母の死後、王位を継承した。ランカスターはフロリドールがアリアラートを演じた、とする。作者は「読者へ」の中で、「ユスティヌスの第37巻」取材し、わたしたちの演劇に相応しく、史実に手を加えた。主要な筋は非常に強烈なので、ラオディスの性格を余すところなく描くために、エピソードを弱めたり、装飾を止めたりしなければならなかった。野心の好例を示すことができたと思うし、また、良くできた絵巻物になった。欠陥がないように細心の注意を払った」と言う。場所はカッパドースの首都。以下、アリアラートは正体が明かされるまではオロントと表記する。

[第1幕]

ローマの大使がやって来るのは、久しく女王ラオディス (Laodice) が統治していたカッパドースに、傀儡になる王を置くためだ。アクシアヌ (Axiane) は、女王が自分と臣下になっている王子を結婚させ、操られることを恐れる。女王には末子のアリアラート (Ariarate) と娘のアルシノエが残っている。王女とだれかを結婚させるのかもしれない。アクシアヌはカッパドースやシリシー (キリキア) の王位より、好きな人と結婚する方を選ぶつもりだ。意中の人は、出自不明ながら有能なオロント (実はアリアラート) だ。オロント (Oronte) もアクシアヌを愛していたが、身分違いだった。オロントは命の恩人、フラダート (Phradate) に、実はアリアラートは自分で、二年間も騙していて悪かったと詫げる。友人、アナクサンドル (Anaxandre) は、オロントと妹のアルシノエ (Alcinoé) の結婚を望んでいる。オロントは、女王の実子、アリアラートはどうするつもりか、と探りを入れる。アナクサンドルは、その前に王位継承してしまえば良い、と言う。

[第2幕]

ラオディスは、ローマの大使が来る前に、アルシノエと意のままになる王子を結婚させてしまおう、と考えていた。だが、王族たちはローマを後ろ盾に女王を蔑ろにするかもしれない。愛するオロントを娘に渡すのも嫌だった。彼を手放さずに王位を維持する方法はないか思案する。女王はアナクサンドルに、アリアラートが戻ってきたら恋敵になるだろうから、アルシノエと関係を強化するように助言する一方、自分はオロントと再婚するつもりだと告げる。アナクサンドルは、身元不

明の臣下と結婚すると言う女王の話に驚く。ラオデイスは、女王と結婚すれば主人と同じ身分になるのだと宣言する。ローマからの大使、アクィリウス (Aquilus) がアリアラート王子を伴って間もなく到着すると知らせが入る。

[第3幕]

アリアラートの到着に絶望するアクシアヌはオロントの愛は無駄だと思う。オロントは、アクシアヌに王座に上ることだけを考えるよう促す。女王は表面上、王子の生還を喜び、アクシアヌとの結婚を祝福する。民衆もそれを望んでいる。アクシアヌは女王の命令に従うと誓う。女王の思惑は、ローマの奴隷となった息子に王位は継がせず、オロントと結婚して、ローマの影響力を排除するつもりだ。オロントは女王に計画のすべてを話させる。ラオデイスは遂にオロントにアリアラート暗殺を依頼する。だが、内密に報告を受けた女王は態度を変え、オロントは裏切りを迫られる。

[第4幕]

ラオデイスは民衆の声など恐れるに足りないと考えている。アクシアヌは、大使が間もなくアリアラート暗殺の真相を確かめに来ると告げる。ラオデイスは、自分は暗殺には無関係だし、息子を亡くした悲しみを斟酌すべきではないかと言う。容疑者はアナクサンドルだ。オロントは真相を明かす。王子は死んでいない。女王はさっそく、フラダートに、この「うれしい知らせ」を広めるように命じる。オロントはフラダートと共に出ていく。大使は、リカニア人たちは、ラオデイスを女王として歓迎しているので、王子を伴って行くように勧める。ラオデイスはこれを受け入れ、息子と共同統治することを表明する。

[第5幕]

ラオデイスは二度も息子を殺し損ねたと口惜しがすが、統治の決意と自信は揺るがない。オロントと共に王座に就くつもりだ。豪華な結婚式を挙げて、リカオニア行きを祝うのだ。オロントは遂に自分こそがアリアラートだと告白する。ラオデイスは激しく混乱する。アリアラートは剣を差し出して、女王に自分を殺してくれと願う。ラオデイスは息子には生きるように命じ、アクシアヌと結婚して王座に就くよう勧める。アリアラートは正体を明かし、アクシアヌは喜んで結婚を承諾する。やがて、ラオデイスが死んだという知らせが来る。剣を一突きして、自殺したのだ。大使は、民衆の動揺を抑えるためアリアラートとアクシアヌが王と王妃として姿を見せるように促す。

(浅谷真弓)

La Mort d'Annibal : Thomas Corneille

テキスト	<i>Oeuvres</i> , Genève, Slatkine Reprints, (1758~) 1970.
ジャンル	五幕韻文悲劇
初演年	1669年11月
初演劇団	オテル・ド・ブルゴーニュ座 または1670年、サヴォイア侯爵の劇団（ロビネによる）
出版年	1670年、Barbin et De Luyne, Paris.
出典	リウィウス、ネボス、プルタルコス、ユスティヌスほか

ランカスターはほとんどをリウィウスに拠ると言う。レリスはカルタゴの将軍ハンニバルについては8編の悲劇で扱われているとして、モントルー（1584）、スキュデリー（1631?）、デマレ（未完）、ドゥプラード（1649）、1669年、11月にオテル・ド・ブルゴーニュ座で上演されたトマ・コルネイユ、リウプルーの1688年上演、未刊行、P・コロニア（1697）、マリヴォー（1720）などをあげている。場所はピテュニー（ピテュニア）

[第1幕]

プルジマス（Prusias）は、ピテュニアは自分が、ベルガモンはアタール（Attale）が治めるべきだと改めて明言する。アタールは、王座に目がくらんで不正を行うことはできないし、アンニバル（Annibal）の娘のエリーズ（Élise）と結婚する方が良い、と考えている。プルジマスはアタールがアンニバルを排除してくれるかもしれないと期待していた。かつてはプルジマス自身がエリーズを好ましく思っていたが、アンニバルには知られていない。アタールをベルガモンの王位につけてしまえば、ピテュニーに対するローマの影響力は軽減される。プルジマスは息子ニコメード（Nicomède）に、自分とアタールの同盟をアンニバルは恐れているに違いない、と言う。ニコメードも、アンニバルが二人の離反を望んでいるらしい感触を得ていた。エリーズはカルタゴのために復讐してくれる人だけが夫としてふさわしいのだと言う。

[第2幕]

エリーズは王子の動揺を宥めているうちに、ニコメードを愛していると打ち明けてしまう。アンニバルは、アンニバル自身がローマに行き、エリーズとアタールが結婚すれば、ローマとベルガモンに人質が二人できるから、ニコメードはもう安心だし、プルジマスも幸福だろうと言う。プルジマスは、アンニバルをこのままピテュニー宮廷に止めておく、と確約する。アンニバルは、ローマがプルジマスとアンニバルを離反させるためなら何でもやったし、これからもするだろうと予測する。プルジマスは、エリーズと結婚し、アンニバルを保護するため、息子をローマに遣ろうと思っていた。アンニバルをローマに引き渡すとしても、ニコメードを遠ざける方法はないものか、とにかくローマの大使、フラミニウス（Flaminius）と相談しようとする。

[第3幕]

エリーズは、義務のためならよろこんでアタルと結婚すると言う。アンニバルが、ローマに対抗する約束だけは守ってほしいと念を押すところへフラミニウスがやって来る。フラミニウスは、アタルに帰国して王位に就くよう伝える。プルジアスはニコメードをローマに派遣して、和平を保つつもりだと言う。アンニバルはアタルと共に明日、出発すると告げる。フラミニウスは、プルジアスにとってエリーズとの結婚にニコメードが邪魔なことを知っていて、息子の代わりにアンニバルを出せば、息子も妻も手に入れられて一石二鳥ではないかと譲歩を迫る。

[第4幕]

フラミニウスのもとに死んだはずのユーメヌ (Eumène) からの手紙が届く。彼はアタルを下して、自分が再びベルガモンを支配するので、ローマの支持が欲しいと言う。フラミニウスは、エリーズを巡る騒動に嫌気がさし、ロードス島を征服したユーメヌに感嘆して、アンニバルの処分を考える。フラミニウスは、手紙のことを伏せたまま、アタルに決断を迫る。アタルは名誉のためには最善を尽くすと誓う。フラミニウスはエリーズとの結婚を急ぐよう促し、アンニバルはカルタゴに返すと言う。アタルはフラミニウスの甘言を鵜呑みにする。しかし、間もなくそれぞれが疑心暗鬼に陥り、友や父、大使の裏切りを知るに至って、混乱を極める中、アンニバルだけは「ファビウスやスキピオがいない以上、アンニバルにふさわしい敵はアンニバルだけだろう」と死に場所を見定める。エリーズはアタルを退ける。そこへローマ人たちによる襲撃の一報が入る。

[第5幕]

エリーズに空約束を激しく詰られたプルジアスはローマ側の計略を言い訳にする。フラミニウスは、アンニバルにはエリーズと共にローマに来てもらい、友人として遇すると言う。ユーメヌ帰還の事実を知ったアタルは狂乱し、フラミニウスはアタルを捕えさせる。エリーズはすべてがプルジアスの策略だと見ぬくが、プルジアスは開き直り、結婚を迫る。フラミニウスもそれを命ずる。ニコメードに助けられたアンニバルが戻って来ると、エリーズは、暗殺者を送り込んだのはプルジアスであり、アタルは失脚した、と告げる。やがて、プルジアスがアタルとローマ人たちの争いに巻き込まれて死んだという知らせが届く。フラミニウスは船で逃走した。アンニバルは、エリーズにニコメードと結婚するように命じ、自らはローマの復讐の火種とならぬよう、服毒したことを打ち明ける。息絶えるアンニバルを前に、ニコメードはエリーズと共にピテュニーを治め、偉大な師であり義父となった人の仇討を誓う。

(浅谷真弓)

Bradamante : *La Calprenède*

テキスト	Sommaville
ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演年	1636年（ランカスター）
初演劇団	オテル・ド・ブルゴーニュ座（?）
出版年	1637年2月7日出版許可、2月20日出版完了
出典	アリオスト『狂えるオルランド』（1543年、仏訳初出）第45歌、第46歌 ガルニエ『ブラダマント』1581年または1582年

ランカスターによれば、悲劇でデビューした作者の二つの悲喜劇のうちのひとつ。もうひとつは『クレリオン』で本作と同時出版。1664年1月10日付ラ・グランジュの帳簿の記載をもとに、サン＝テニャン公爵作『笑うべきブラダマント』と混同されたが、モーボワン、パルフェ兄弟の指摘により、ラ・カルプルネード作と確定した。現存する刊本にはタイトル下に手書きでラ・カルプルネードの名前がある。出典はアリオストだが、細部はガルニエの『ブラダマント』に拠るところが大きい。ガルニエよりさらに余分なエピソードや喜劇味を排除し、統一感のある筋がシャルルマーニュの宮廷という同じ場所、24時間以内で展開する。

[第1幕]

ギリシアの王子、レオン（Léon）に恩義を感じているロジェ（Roger）は「本来の主人」を裏切り、レオンのために尽くすことにする。身代わりになって、決闘を行うのだ。一方、ブラダマント（Bradamante）は行方知れずの恋人、ロジェとの思い出に浸っている。ブラダマントの父、エモンと兄弟、ルノー（Renaud）はブラダマントの結婚を巡って言い争う。レオンはシャルル（Charles）の宮廷の華やかさを称え、王命に従い、ブラダマントを得るために歴戦の勇者である彼女自身と戦うことを受け入れる。ブラダマントもレオンとの決闘を承諾する。しかし、ロジェの姉妹でこれもまた武勇で鳴らした女騎士、マルフィズ（Marfise）が不在の兄弟の心情を代弁するので、エモン（Aymon）はおもしろくない。シャルルは再び、怒り出したエモンを宥める。

[第2幕]

レオンの武具を身にまとったロジェは恋するブラダマントと戦うことになった不運を嘆く。マルフィズは悩むブラダマントを励まし、ブラダマントはロジェのためにも絶対に勝つと宣言して相手に変装した恋人とは知らずに敵を迎える。熱戦の様子はエモン、シャルルの重臣ネーム（Naymes）ら観客たちの台詞で実況される。初めは互角だったブラダマントは劣勢になり、ロジェが声を偽って、負けを認めるように言うので、ブラダマントは尚更強く踏み込む。エモンはすかさず勝負の行方を見極め、二人を分けることを王に願い出る。王の命で二人は戦いを止める。

[第3幕]

ブラダマントは見事な戦いぶりを示した決闘の相手に「新たな恋」の予感を持つ。だが、ロジェに対する貞節の誓いを破るなら、死を覚悟しなければならないだろう。マルフィズはロジェへの思いと敵への恋に引き裂かれたブラダマントに同情する。ロジェは自分の服に戻り、レオンの身代わりになったことで恋人も自分自身も失ってしまったと嘆く。マルフィズはシャルルの前でブラダマントの不実さを語り、ブラダマントとロジェの結婚を賭けて、不在の兄弟のために自分が彼女と戦うと言いつつ。レオンは自分こそがマルフィズと戦うと受けて立つ。シャルルは新たな決闘を許す。

[第4幕]

ロジェは森の中に逃げ込み、嘆いている。レオンは衰弱したロジェを発見し、連れ戻そうと説得を試みる。命の恩人、レオンへの忠誠心を捨てるわけにはいかず、ブラダマントのことも忘れられなかったロジェにはもう死ぬ以外に手立てがない。しかし、レオンが、このままではブラダマントは失意のうちに死ぬだろうと断言するので、ロジェはようやく宮廷に戻ることにする。

[第5幕]

シャルルはレオンが来ないのを心配し、マルフィズはレオンの臆病さを嘲る。謎の騎士を伴ってやって来たレオンは前の決闘は自分が戦ったのではないと言うが、シャルルは信じない。この騎士こそロジェだった。ロジェはルノーと共にフランスへの忠誠を新たに誓う。そこへブルガリアの大使らが王として推挙された人物を訪ねて来る。その名はロジェ・ド・リズだ。シャルルはロジェに顔を隠したままブラダマントと会うように命じる。レオンはブラダマントに、結婚の権利はこの騎士にあると言う。ブラダマントは再戦に応じる覚悟だが、シャルルはすかさず兜の庇を上げる。ブラダマントがロジェの顔を認め、驚く間に、ロジェは跪いて許しを請い、シャルルは「ブルガリア王」にブラダマントを与えると宣言する。皆がロジェとブラダマントの結婚を祝福する。

(浅谷眞弓)

Françoise Pascal : *L'Amoureux extravagant*

ジャンル 一幕（全十六場）韻文喜劇
 初演 不明
 出版 *Diverses poésies*（リヨン、1657年）に所収

1650年代、一幕物の喜劇が伝統的ファルス背景を捨てて、ブルジョワや貴族の生活の一断面を表現するようになった時期の作品である。初演については、作者が献辞で触れていないことから、公の上演はされなかったようだ。しかし、作者が出入りしていたリヨンのサロンの仲間内で、あるいは父親が仕えていた主人（演劇愛好者ヴィルロワ元帥）の関係者によって上演された可能性はある。

中心人物で玩弄の対象となっているのは《恋する／詩人》フィロンで、この両要素の結合は、世俗的常識の代名詞である下僕に言わせると、「完璧な狂人」だ。だがこのへぼ詩人は、恋する男としては誠実で、意中の女性クロリスのためには闘いも辞さないし、全財産も投げ出す用意がある。作者は彼を、《頭がおかしい（extravagant）》が、損得を度外視して尽くす愚直な善人としても描いているのである。

なお、フランソワーズ・パスカル（1632-1698以降）とその作品については、『混沌と秩序』（中央大学出版部）所収の第八章「フランス十七世紀女性劇作家たち」（野池恵子）を参照されたい。

[第一場] クレアンドル（Cléandre）の下僕クリトン（Cliton）は、主人からアマラント（Amaranthe）への恋文を託される。

[第二場] クリトンは、恋に落ちた主人を「狂人」とみなし、愛の神を批判する。それを聞いていたフィロン（Philon）が激昂し、クリトンを非難。クリトンは、この自称詩人が恋に夢中だと知り、彼を「完璧な狂人」とみなして退散する。フィロンは舞台脇で詩作に没頭。

[第三場] クロリス（Cloris）の侍女ドランド（Dorinde）は、女主人とその恋人ティルシス（Tyrcis）との頻繁な恋文のやりとりをこぼす。

[第四場] 恋文を渡してきたクリトンが戻り、使用人二人は愚痴をこぼす。クリトンはドランドを口説く。

[第五場] 現れたクロリスに、フィロンは自作の詩を捧げようとする。

[第六場] ドランドが割って入り、フィロンは無視される。

[第七場] ティルシスやクレアンドルが現れたので、クロリスはフィロンの詩を聞こうと提案。詩人は得意げにきわめて稚拙な詩を披露する。クリトンが構成や脚韻について、いっばしの批判をする。皆は下僕を黙らせ、フィロンを持ち上げて、詩人が自己陶醉して自作を朗読しているあいだに姿を消す。気づいた詩人が狼狽していると、クリトンがご注進。クロリスが今しがた盗賊に誘拐された、と。フィロンは慌てて救出に向かう。

[第八場] クリトンはドランドに、フィロンの財産を巻き上げるつもりだ、と話す。

[第九場] 「盗賊を取り逃がした」フィロンが戻ってくる。

[第十場] ドランドが、クロリスは恐怖と苦痛で亡くなった、と報告。フィロンは怒り悲しみ、死者の国に赴いて悪鬼らと闘い彼女を奪還する、と息巻く。

[第十一場] クレアドルはアマラントと密会する。彼は彼女にクリトンの策略を告げる。

[第十二場] 物乞いに変装したクリトンは、死者の国から生還したと称し、向こうではクロリスが貧窮し、餓死しそうだとフィロンに話す。気を揉む詩人に下僕は、彼女を救うには、冥界の有力者や関係者に大金をばらまかねば、ともちかける。フィロンは金を取りに行く。

[第十三場] クリトンはフィロンから、徐々に金貨を巻き上げていく。まず冥界の王プルートーに100ルイ、その後プロセルピナに10ルイ、以下、小姓たち、下僕たち、門番たち、三途の川の渡し守、果ては死の神バルク、さらにクリトンへの心付けで、詩人は合計194ルイを騙し取られ、手元に残ったのはたった6ルイだ。クリトンはこれでクロリスを「救える」と請け合い、出かける。

[第十四場] クレアドルとアマラントがクリトンから事情を聞く。詩人が払った額を知って、二人は下僕の手腕に舌を巻く。

[第十五場] 希望に満ちてクロリスを待つフィロンに、下僕の仕着せに戻ったクリトンが、手に握りしめているものは何か、と尋ねる。フィロンは、これは金貨で、「いくらあるか当てたら、6ルイ全部やろう」と言う。もちろんクリトンは言い当てる。愕然とするフィロンだったが、クロリスの姿が見えたので、喜んで下僕に金を与える。

[第十六場] ところがクロリスはティルスと手を携えており、彼こそが冥界の悪鬼から彼女を救い出してくれたのだ、と告げる。フィロンが提供した大金については全く知らない、と。愛する人と全財産を失って消沈するフィロン。クレアドルはクリトンに、最後に巻き上げた6ルイだけは返させる。フィロンは健気に、クロリスとティルスを祝福して去ってゆく。結婚資金をたんまりせしめたクリトンはドランドに求婚し、受け入れられる。

(鈴木美穂)

Françoise Pascal : *L'Amoureuse vaine et ridicule*

ジャンル 一幕（全十六場）韻文喜劇
 初演 不明
 出版 *Diverses poésies*（リヨン、1657年）に所収

前記の *L'Amoureux extravagant* 同様、作者がリヨンで出版した *Diverses poésies* に収められている。したがって、初演についても前記の作品と同様のことが推測される。また、人物構成と筋（下僕と二組の恋人が滑稽な変わり者を弄ぶ）も同型であるが、中心人物の性が異なるという対照性がある。

本作で玩弄されるヒロインの造形は、デマレ・ド・サン＝ソルラン（Desmarets de Saint-Sorlin）の『妄想に囚われた人々』（*Les Visionnaires*、1637年初版）に登場する、皆が自分に恋していると思い込んでいる女、エスペリーに触発されたと思われる。そしてこの女性像は、モリエール作『女学者』（1672年初演）のベリーズに連係する。女にとって若さと美貌が物を言う世の中で、老嬢で醜貌という現実を受け入れられないクロランドは妄想の世界に逃げ、生き延びている。虚栄が為せるわざでもあるが、周囲に弄ばれてもへこたれない彼女に注ぐ作者のまなざしは、決して意地悪くはない。

【第一場】フィリス（Philis）とクランドール（Clindor）は恋人同士だ。彼らは、「不細工で年もいつているのに、全男性を虜にしていると思込んでいる」クロランド（Clorinde）をからかうため、クランドールが彼女を愛する振りをすることに決める。

【第二場】クロランドが自分の魅力を誇る。「50人の女が一年かけてつくる数以上の恋人を、私は一日で得てしまう」と。下僕の姿を見て、自分に恋文を届けに来たと思う。

【第三場】フィリダモン（Philidamon）の下僕クリッソン（Crisson）は、強引なクロランドに手紙を見られる。宛名は、「可愛いイザベル（Isabelle）へ」となっていた。クロランドは、イザベルはだまされている、フィリダモンが恋してるのは私だ、と主張。下僕が、主人とイザベルはお似合いで、彼女の方がクロランドよりずっと若い美しい、と率直に事実を述べても動じない。閉口した下僕は退散する。

【第四場】現れたフィリスにクロランドは、恋文を持ってきた下僕を叱りつけて追い返した、と言う。百万人もの求愛者全てを癒す方法などない、と。フィリスは、それは厳しすぎる態度では、と調子を合わせる。

【第五場】クリッソンはフィリダモンに、イザベルがここで逢引を承知した、と告げる。

【第六場】イザベルとフィリダモンは愛を誓い合う。二人はクロランドをだまして楽しむことにする。

【第七場】フィリダモンはやって来たクロランドを賛美し、イザベルは捨てられた女として彼を責める振りをする。クロランドは得々としてイザベルを慰める。

【第八場】やって来たフィリスも嘆いている。クランドールがクロランドに夢中になったのだ。フィリダモンは恋敵を倒すと息巻き、飛び出して行く。皆、後を追う。

[第九場] クロランドは、自分の美貌が不幸と災いをもたらしているのを嘆く。

[第十場] イザベルとフィリスは、そんなクロランドを観察して嘲笑する。「彼女、不安と満足を同時に感じていたわね」と。

[第十一場] クロランドが、二人の男の運命に心を痛め、こんなに美しくない方がよかった、と嘆息する。

[第十二場] 主人を心配するクリッソンにクロランドは、自分の容姿を自慢する。「私を見た人は、15歳以上だとは思わないでしょうね」。クリッソンは、「プラス15か16だな」と傍白。

[第十三場] その時、クランドールとフィリダモンが、闘いながら舞台を横切って行く。クロランドは助けを呼ぶ。

[第十四場] イザベルの父ダモンが現れる。彼は決闘の理由がクロランドだと聞いて仰天する。

[第十五場] 若者二人は「和解した」。ダモンは、娘とフィリダモンの結婚を許す。

[第十六場] 「和解」の理由は、「この女性たち（イザベルとフィリス）の涙が止めてくれたから」だった。二組のカップルが成立した。フィリダモンはクロランドに、彼女の態度は「厳しすぎ、非情すぎた」、と説明。クロランドは納得し、「こんな些細な征服、喜んで譲るわ」、「私が手に入れるのはもっと偉大で名高い男たち」とめげずに自身を鼓舞するのだった。

(鈴木美穂)

Françoise Pascal : *Sésostris*

ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演	1661年 リヨン
出版	1661年 リヨン
出典	スキュデリー嬢『アルタメヌ、あるいは偉大なるシリユス』（出版1649~53）よりセゾストリスの物語（6部 第二の書）

作者は序文で初演の際の成功を喜んでいる。共同執筆者がいたに違いないという誹謗を否定して、自分は田舎の若い娘であり十分な教育を受ける機会がなかったために劇の形式に不首尾があったことは認めると述べている。しかし校訂版編者は、それにもかかわらずこの作品が卓越した悲喜劇であると主張。謎解きにかかわる筋が中央に配され、巧みなやり方でサスペンスが持続していく。ト書きが多用され、「盗み聞き」をうまく取り入れたり、手紙を読み歌を聞かせるなど、演劇的效果をあげるための配慮が随所に見られる。何と言ってもこの作品の独創性は、ただ恋人の完璧な愛を描くだけでなく、王位篡奪者のアマジスが最後に父性に目覚めて、権力も野望も捨てて情愛深い高邁な男に生まれ変わる点に見いだせる。場所は古代エジプトの首府エレファンティヌおよびその周辺（ナイル川に浮かぶ小島群の一つがエレファンティヌ、現在はアスワンに含まれる）。宮廷と森の2箇所が舞台とされ、時間も、結構な日々が過ぎている。

[第一幕]

宮廷。国王アマジス（Amasis）は悪夢を見て目を覚ましたところ。極度の不安に陥り夢の内容を寵臣のエラクレオン（Héracléon）や彼の姉妹のリゼリーヌ（Lysérine）に語る。彼の軍に殺害された先王アプリエズ（Apriez）と、アマジスの今は亡き妻ラディス（Ladice）の二人が夢に現れて、王位を正当なる継承者であるアプリエズの息子のセゾストリス（Sésostris）に渡すように言う。現在は行方不明でも必ずどこかで生きているはずだからと断言し、約束を守らなければ何度でも夢に出てくると脅かす。また妻は、死ぬ直前にアマジスの子を産んだとあかす。息子が娘かは言わない。二人が姿を消した時はすさまじい轟きが響きわたったと王は続けて語り、再び恐怖に襲われる。夢談義をしているところに、先の戦で味方に勝利をもたらしたのち、姿を消したプサメタイト（Psammétite）と名乗る若者がいることが報告される。また、亡き王妃の手による手紙が届き、子どもがどこかで生きていることが証拠づけられる。アマジスはそれらの子どもたちを探すよう命令をだし、自身の子どもが息子の場合と娘の場合を考えて結婚相手を選ぶ。

[第二幕]

森の中。セゾストリスは戦功をあげて森に帰り、恋する羊飼いの生活に戻る。羊飼いの娘ティマレット（Thimarette）への想いがつのるが、教育係のアメナフィス（Aménaphis）から結婚は反対されていた。アメナフィスは二人の結婚に異を唱えたばかりか、重要な事情があるからと言ってまも

なく彼女を島から余所へ連れ出してしまった。その寂しさから彼も島を出て戦争に加わったのだ。ところがティマレットは時を同じくして再び島に戻された。セゾストリスは森に彼女の姿を認めて喜び、腹心に言われるがまま、隠れて恋人と侍女の会話を盗み聞きする。彼女は恋人セゾストリスのために歌をつくり、それを歌うのだった。一方国王のアマジスは若い英雄プサメティト（＝セゾストリス）を探して森にやってくる。そこで二人の若い男女に出会い、王はプサメティトが生き別れになっている我が子と信じてしまう。年齢からみて娘の方が彼の子どもだと思えたにもかかわらず、老羊飼いたラゼアス（Traséas）のプサメティトこそ王の息子であるという嘘に騙されてしまうのだった。そのトラゼアスは、昔この地にアメナフィスが2人の女性を連れてきた、一人の女は男児を出産した後に死亡、もう一人の女もその後死亡、この時その女は子どもを一人連れていたと伝える。一方アマジスは、プサメティトの実名がセゾストリスだと聞かされてもふれた名前だと思っただけで、先王の息子のセゾストリス本人とはつゆほども疑わず、彼を宮廷に呼び寄せることにする。それに対してセゾストリスは、森に退いていた恋人ティマレットに宮廷には行かず逃亡することを示唆する。

[第三幕]

場所は再び宮廷。セゾストリスは腹心のミリス（Miris）から、身分の点から考えると、やはり相手はリゼリーヌが相応しいと意見されるが承知しない。そこに現れたエラクレオンに促されてセゾストリスは退出して王のもとに行く。エラクレオンは、実は国王の子どもが女だという情報を得ていて、嘘をついたとトラゼアスを糾弾し、彼に真実を国王に明かすよう命じる一方、リゼリーヌには彼女が慕うセゾストリスの真の身の上を隠したまま、彼女の愛は成就しないと行って姉妹をいらだたせる。結局トラゼアスは、ティマレットこそが王の実の子どもであり、セゾストリスは自分の息子だと国王に打ち明けて、謝罪。そこにエラクレオンの腹心のタニジス（Tanisis）が書字板の入った小箱を持って登場する。ある兵士が持っていたもので、蠟が付着して判読不可能になっていた文字が、実は「娘」であったという。アマジスは証拠の品を突きつけられて、ティマレットを我が娘と認知せざるを得なくなる。彼は娘をエラクレオンと結婚させることにしたので、エラクレオンの目論見は実現することになった。しかし王は、勇敢なセゾストリスがただの羊飼いととは思えず、まだ秘密が残されていると感じる。

[第四幕]

アマジスは夢にみた亡霊を思いだす。夢で彼は亡き先王や妻に非難され盲目だと罵られた。真実が明らかになった今、彼は正しい選択をして後継者を決め、妻や自分自身の魂を落ち着かせたいと思う。しかし民衆が暴動を起こして、勇敢なセゾリストを国王にするよう求める。アマジスは民衆の怒りを鎮めるため急ぎ退出。残されたティマレットは会いにきたセゾストリスと運命の急変を嘆きあう。二人はお互いの愛を再確認し、成就されなければ死ぬと言うセゾストリスにティマレットは、想いを隠すように助言。それを受け入れた彼は、戻ってきたアマジスたちに気持ちを悟られないよう脇に退き隠れて事態を見守る。暴動を収めたアマジスは、民衆に王女をお披露目する約束をしてきたので、さっそく実行しようとしたが、王にとって気になるのはセゾストリスの気持ちだ。

尋ねられたティマレットは彼が変わることなく王アマジスを慕っていると答えるが、隠れていたセゾストリスは声だけでそれに続けて恋人を失う位なら自分は死ぬと王に答える。王はセゾストリスにそばに出て来るよう命じ、婿の話を開くと、急に体の不調を感じて動揺し、力が抜けて目も見えなくなってしまう。一部始終を目撃したミスは、王が盲目になったのが婿の話をした直後だったことに言及し、秘密の運命が彼を突き動かしていると指摘する。

[第五幕]

エラクレオンはティマレットに前場で想いを打ち明けている。ここで彼女にさらに言い寄りその眼差しの魅力を褒めそやすが、拒否されて退出。そこに現れた盲目となったアマジスは、娘の存在に気づかないまま、再び見た亡霊の話を実隊長に報告する。妻は、娘の発見だけでは不十分、王位をセゾストリスに返さなければ王家の繁栄はないとし、アマジスの目も治癒しないと述べた。ラトーヌの神託もセゾストリスが王位継承者と認めた。しばらく前に宮廷に到着したアメナフィスによって今いるセゾストリスこそが先王の息子ということも判明した。彼は王座を譲る決意を固めたが、そばにいた娘によく気づいて、彼女にもそれを告げる。当初ティマレットは、どのセゾストリスが先王の息子が特定できなかったが、ようやく事態を把握したもの、今度は彼が王位篡奪者の娘などと結婚など果たしてするかどうか不安に陥る。アマジスは舞台上の肘掛け椅子に腰掛けてしばし夢想する (rêver) が、アメナフィスが姿を現したのを機に、実隊長に支えられてアメナフィスと退出。ティマレットはセゾストリスと愛を再確認し、王座より愛が大切と言いあう。その間に目の治癒したアマジスが支えなしで戻り、セゾストリスに正式に王座を返すと宣言。視力は引退の決意とともに回復したと言い、王座を失うのにもかかわらず満足感にあふれていると打ち明ける。アマジスは、存命中は王位に留まるよう、同時に若い二人の結婚を許すようセゾストリスから求められる。また、アメナフィスはセゾストリスのあとを追って戦場に赴きそこで捕まり投獄されていた、その際、持っていたタブレットを失ったが、罪が晴れて解放され、アマジスの宮廷に参上して、全てを白日の下に晒したと皆に報告する。一方、目論見がすべて失敗したエラクレオンは、兵を集めてティマレットを奪うために蜂起するが、セゾストリスに鎮圧される。しかし恋故の叛意なので、エラクレオンは許される。リゼリーヌは置き手紙をして郷里に引き込んだと報告されるものの、王は時が彼女の傷を癒やしてくれると信じる。二人の愛が祝福されて幕がおりる。

(野池恵子)

Françoise Pascal : *Le Vieillard amoureux, ou l'heureuse feinte*

ジャンル 一幕（全十七場）韻文（八音節）喜劇
初演 不明
出版 1664年（リヨン）

リヨン生まれの作者は、1667年頃パリに移住した。本作はそれ以前にリヨンで出版されたもので、オテル・ド・ブルゴーニュ座で上演されたという研究者もいるが、証拠となる資料はない。前記二作の一幕喜劇に比べると、筋、音節、身体的演技（夜のラッツィ）などの点で、より伝統的なフェールスに近く、同時に『アストレ』のロマネスクな要素も組み込んでいる。

結局は「愛」に回収される若者たちのなかで、ひとり小間使いが恋の口説への懐疑を表明しているのも喜劇の伝統に含まれるが、結婚後の妻に同情する下僕の次の台詞は興味深い——「[...] 殴られない妻は、千人のうち四人もいませんよ。[...] 恋の炎が消えてしまうと、男たちは可哀想な女 [= 妻] を役立たずのように虐待するんです。お忘れですか、旦那の奥様だってあんなに不幸で、いつも泣いていらしたじゃないですか」（第一場、主人に）。

作者が残した三作の喜劇は、伝統から継承したステレオタイプを時代の嗜好に応じて変化させ、個人的なニュアンスを加えて、新たな風俗喜劇の創造に貢献するものであったと言えよう。

[第一場] 舞台はリヨン。年頃の娘イザベル（Isabelle）をもつ老人（Le Vieillard）は吝嗇で、財産が減るのを恐れ、娘の結婚も恋愛も禁じて家に閉じ込めている。一方、自身の結婚、恋愛については意欲的だ。だが今夜は小作地の見回りに行かねばならない。見張りを下僕のフィリパン（Philipin）に託し、外出する。

[第二場] フィリパンは、老人にまだ恋する気があるのを知って呆れる。下僕はイザベルの小間使いドリーヌ（Dorine）に夢中である。

[第三場] イザベルとドリーヌが戸口に出てくる。イザベルはクレアンドル（Cléandre）と恋仲になっているが、監視が厳しく、なかなか会えない。そこでドリーヌは、言いなりになるフィリパンに、夜食を買いに行かせる。

[第四場] 出かけたフィリパンは夜警たちに怪しまれ、滅多打ちにされる。

[第五場] 逃げ帰ったフィリパンは色々と言いつし、せめて明かりが欲しいと言うが、けちな老人はランプやろうそくを、施錠した戸棚にしまい込んでいる。彼は仕方なく、また暗い中を出かけようとする。

[第六場] だが臆病な下僕は、なかなか出発しない。ドリーヌに叱責され、嘆きながら家を後にする。

[第七場] イザベルはやっとクレアンドルと心置きなく話せることになった。

[第八場] ところが、フィリパンがまた戻って来た。今度は酔っ払いの一团に遭遇し、棒で殴られた、と。ドリーヌがまたどやしつけて行かせるが、下僕は女性たちの態度に疑いをもつ。

【第九場】フィリパンは、幽霊を見たと称して走り帰り、恋人たちの不意を襲う。クレアンドルは見つかってしまった。が、彼は下僕を買収する。フィリパンはあっさり主人を裏切り、今度は恋人たちを守る見張りに立つ。すると老人が戻ってくるのが見える。ドリーヌが一計を案じる。クレアンドルを女装させ、困窮して助けを求めに来た異邦人だと老人に納得させるのだ。

【第十場】老人を戸口で迎えたフィリパンは、訪れた異邦の美女について説明する。容姿を細かに聞き出した老人は彼女に興味を持ち、すぐに会いたがる。下僕は、もっと粋な服に着替えねば、と止める。「美女」が現れたので、下僕は老人を背後に隠す。

【第十一場】クレアンドル（女装）、イザベル、ドリーヌの三人は、老人に聞かせるため、策略通りの会話をする。老人は傍白で懐疑的なコメントもするが、フィリパンに誘導され、偽の美女に魅せられる。

【第十二場】皆はフィリパンの手腕に感心する。ドリーヌは彼を見直し、恋人として受け入れる。

【第十三場】クレアンドルはイザベルに、セラドンも女装して恋するアストレに近づいたことを思い出させる。

【第十四場】流行遅れの伊達男のなりをした老人が現れる。老人は「美女」の出自やこれまでの経緯を尋ねてクレアンドルを困らせたりするが、やがて情熱的に求婚する。「美女」は、過去のつらい記憶が去るまで待つて欲しいと頼む。

【第十五場】フィリパンが、分別を持つべき老人の愚かな恋を揶揄する。

【第十六場】フィリパンが、疑うドリーヌに愛を誓おうとしていると、家の中で大騒ぎが始まる。

【第十七場】策略がばれてしまった。老人は、娘と美女の様子を見たくて、ドアの隙間から覗き見をした。するとクレアンドルが女装を解いたので、騙されたことがわかったのだ。激怒する老人に対し、皆がそれぞれの理を尽くし、さらに泣いて許しを求める。ほろりとなった老人は心を解き放ち、寛大に娘たちの結婚を許す。フィリパンの台詞で幕。「多くの心痛の後に、我らの芝居のおかげで全てが首尾よくいきました」。

(鈴木美穂)

Quinault : *Pausanias*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1668年11月17日、オテル・ド・ブルゴーニュ座
初版	1669年
主な出典	ラシーヌの『アンドロマック』、プルタルコスの『英雄伝』の「シモン6」「アリストイデス」など。

この初演のちょうど1年前の1667年11月16日から上演されたラシーヌの『アンドロマック』と状況や人物の相関関係、それに場面やせりふまで彷彿とさせるところがあり、ラシーヌの作品に着想を得たことははっきりしている。十七世紀にはよくある同じ題材を競う戯曲と言えるが、通常と異なるのは、ライバル劇団と競合するための戯曲ではないということである。モリエールに対抗したラシーヌの喜劇『裁判きちがい』が失敗に終わり、オテル・ド・ブルゴーニュ座が次に白羽の矢を立てたのが15年前からほとんどの戯曲を同劇団で上演していたキノーである。配役も、捕虜に恋をするポーザニアスは前年のピリュス役のフロリドール、ポーザニアスに父親を殺された捕虜クレオニスアンドロマック役だったデュ・バルク嬢、ポーザニアスの婚約者デマラットはエルミオーヌ役を演じたデ・ズイエ嬢であった。キノーのラシーヌに対する挑戦状である。

歴史上のポーザニアスはスパルタの王族で、第二回ペルシア戦争時の前479年に、プラタイアの戦いでペルシア軍を壊滅させたギリシア連合軍の総指揮官である。クレオニスの名前と戯曲の最後の誤認による殺害、アテネに指揮官の座を移そうと暗躍するアリストイドはプルタルコスの『英雄伝』によるが、同書がポーザニアスを暴君で、敵と密通する人物に仕立てているのとは対照的に、ここでは恋に揺らぐ真摯な人物として描かれている。『アンドロマック』の登場人物が恋に我を失い、相手を拉致することを考えたり、脅迫したりするのに対して、ポーザニアスはクレオニスに愛を告白する前に自由にし、そのことで味方の反発を招き失脚に至る。強烈な個性を放つデマラットも、政略結婚に飽きたらず、ポーザニアスが自由に本心から自分を愛してくれることを望み、自分を犠牲にしてもポーザニアスの意志を尊重する徳の高いところをみせる。だが、これは冷酷な策略にも変貌し、その二面性がこの芝居の最大のみどころでもある。クレオニスについては、校定版(Droz 2004年)の序文にW.ブルックスは、精彩がない人物としている。ポーザニアスを遠ざけようとしながらも、内心恋心をいだき、デマラットにだまされ、政略に翻弄される女性だが、最後はポーザニアスにいっしょにペルシアに逃げることを要求する気丈な一面も見せる。

時間に関する言及が少ないが、最後のクレオニスの殺害は夜に行われ、デマラットが明かりを探しに行く。深夜か早朝に終わる一日の出来事と判断できる。舞台はビザンスで、この地はペルシアに近く、スパルタとアテネの権力争いに好都合な場ではあるが、戯曲には地名や歴史的背景に関する言及はほとんどなく、空間的・時間的な広がりあまり感じられない。

[第一幕]

スパルタの王女デマラット Démarate は「一日で30万人のペルシア人を壊滅させた」ギリシアの将軍ポーザニアス Pausanias との結婚が約束されているが、ポーザニアスが捕虜にした王女クレオニス Cléonice のもとに毎日通うことをいぶかっている。ポーザニアスは、ギリシアの将軍の座を狙うアテネのシモン Cimon（登場せず）がクレオニスとの結婚を申し出ていることに憤り、デマラットに自分の権力を固めるまでと称して結婚の延期を願い出る。政略結婚であっても愛を育みたいデマラットは結婚の延期は自分のせいにしていいと承諾する。しかし、ポーザニアスは側近にはクレオニスを愛していることを告白する。彼女の父親を殺害したことも、ギリシアが反対することも、障害がある分かえって価値ある恋に映る。そこにアテネの指導者アリストイド Aristide がやってくる。シモンの友人であるはずだが、クレオニスの獲得についてポーザニアスの肩を持つ。側近とふたりになって、アリストイドは、ギリシア人はペルシアに助けを求めた王の娘であるクレオニスを嫌っており、友人シモンが将軍の座を勝ち取るにはクレオニスとの縁を切る必要があると考えていることを明かす。

[第二幕]

クレオニスは侍女にポーザニアスを愛してはならないのに、愛してしまっているジレンマを打ち明ける。ポーザニアスは去ろうとする彼女を止めて、ギリシアがクレオニスの運命を任せてくれたので、彼女を自由にすると伝え、自分の思いを打ち明ける。そこにデマラットがやってきて、ポーザニアスにクレオニスの釈放を頼む。すでに自由の身になっていると知って、クレオニスと二人になったデマラットは、自分はほかのひとに恋をしているとクレオニスをだまし、クレオニスからポーザニアスに結婚を申し込まれたことほのめかす発言を引き出す。真相を知ったデマラットは悲嘆し、復讐を誓う。

[第三幕]

アリストイドは、クレオニスを娶る当てがなくなったシモンを避けつつも、シモンが「世界一高い位」につける状況が整ったと語る。ギリシア人たちはポーザニアスとスパルタの支配に対して、反乱し始めている。スパルタのほうもデマラットを侮辱されたと感じている。そこにデマラットがアリストイドの助けを求めに来るが、驚いたことに、結婚を延期しているのはポーザニアス以外のひとに恋をしている自分だと語り、結婚の約束から自由になれるよう後押しを頼む。そこにポーザニアスが来て、アリストイドがほのめかして去った「秘密」についてデマラットに聞かす。デマラットは自由の身になりたいと言うが、恋をしているのは思知らずな男だと話し、ついに思知らずはポーザニアス自身だと告白する。その恋故にポーザニアスの危機を救うために自分から婚約を解消しようとしているのだと言う。デマラットの献身的な愛にうろたえたポーザニアスはクレオニスとの縁を切ることを決意する。しかし、別れの前にクレオニスに一目会いたいと言う。

[第四幕]

アリストイドはギリシア人の名のもと、クレオニスを自由の身にしたことに抗議にくる。解放されたクレオニスは父親同様、謀反を起こし、その美貌で敵国に味方を作るかもしれないと言うの

だ。ポーザニアスは反発する。だが、旅支度をするクレオニスに心が引き裂かれ、引き留める。クレオニスは父親を裏切り、ギリシアが認めない結婚はかなわないと悲観するが、ポーザニアスも恋に犠牲を払ってくれるなら、ギリシアから二人で逃げようと提案する。ポーザニアスは応じるが、結婚がこの地で認められるか様子を見てからにしようという。デマラットはシモン一派が反乱を企て自分に相談してきたと告げ、今夜ポーザニアスとクレオニスの命を狙うと知らせる。クレオニスを守りに行こうとするポーザニアスを制止し、任せてほしいと言う。しかし、侍女にはクレオニスしか眼中になく、去ろうとするポーザニアスへの悲痛な思いを露わにする。怒りをついに爆発させて、殺すだけでないもっと辛い復習を企てていることを明かす。

[第五幕]

アリストイドはギリシア勢が宮殿を包囲したと告げ、ポーザニアスに降参を促しにくる。命は惜しくないというポーザニアスにクレオニスの命も助けてもいいと説得する。次の場面、ポーザニアスは側近にシモンは死んだと告げる。夜にデマラットが、敵が暗殺にやってくると知らせに来て、闇の中で刺したのだ。あまりに呆気ない勝利に、戸惑っているが、地位を捨ててクレオニスと静かに生活することを夢見る。アリストイドはライバルのシモンが勝利し、ポーザニアスに危害は加えない約束をしたと報告する。シモンが生きていることに驚くポーザニアスは、クレオニスを保護しているはずのアリストイドの側近に尋ねると、彼女はデマラットに連れていかれたと聞かされる。ポーザニアスはデマラットの口から、闇の中で殺したのは、シモンではなく、クレオニスだったことを聞かされる。殺してほしいと請うデマラットをよそに呆然とする。デマラットはポーザニアスの剣を使って自害し、ポーザニアスはアリストイドらの励ましを聞かず、倒れて息を引き取ったようにみえる。

(萩原芳子)